

環友 (あい)

光耀抄	2
琥珀集	6
瑠璃集	15
瑪瑙集	27
紅玉集	29
俳誌交歓	31
7月号月評	32
恵贈句集拝見 (76)	34
恵贈俳誌拝見 (42)	36
特別作品「壬生の辻」	38
琥珀集作品鑑賞	40
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ	41
瑠璃集作品鑑賞Ⅱ	42
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞	43
他誌転載	46
「福袋」共鳴3句	48
イザナミの言語学 (7)	50
福井一泊吟行記Ⅱ	52
琵琶湖俳句サロン	54
エッセイ「私のほやき」	55

今月の一句

羽抜鶏追はれて墓も笑ふべし 桂 樟蹊子

(昭和三十四年作)

奥嵯峨の化野念仏寺の沢山の石仏やお墓を、頭に浮かべていただきたい。その中を追われる羽抜鶏と、それを追いかける住職との姿を思い浮かべると「笑ふべし」の語彙が実感として迫ってくる。桂樟蹊子の句に俳諧味の「諧」の勅いた句は多くない。珍しい貴重な一句であろう。格調を崩さぬ表現に惹かれる。

隆子

越路訪ふ

塩路隆子

肥沃なる越前の畑麦青む

あたたかや船主幡の茶の実紋

窯の辺に踏む陶片や春寒き

嘆き竹偶の髪なびかせて春の風

白亜紀に身を置くひと日春愁ふ

のどかなり町家遺構の外厠

鶯や漉き重ねたる越前紙

七月号光耀抄

塩路 隆子選

運び終へ庭の木蓮目にしむる
昭和の日戦後生まれの飢ゑ知らず
祭神は稗田阿礼風薫る
たんぽぽの絮よき風を待ちてをり
赤秀樹林に夏うぐひすや日の出待ち
聴覚の検査さ中や亀の鳴く
ピアスして退院の朝聖五月
筑摩祭鍋釜かづく乙女たち
別れ霜磨崖仏在るかくれ里
甘き風に髪遊ばせて紫木蓮
書肆棚の季寄せ繰りゐる薄暑かな
誘はれて比良山荘の豆の飯
母の日の母黙々と米を磨ぐ
万葉の和歌の小径や躑躅燃え
神将の褰に残る朱春の堂
水軍の島にひと刻蝶の昼
木洩日のひと日の小径聖五月
仏みち辿る山辺の韮草
夜須礼の祭笛吹く京の子ら

西垣 順子
竹内 悦子
山口キミコ
塩路 五郎
鈴木 照子
栗倉 昌子
飯田美千子
橋本 靖子
山崎 里美
秦 和子
笠井 清佑
三川美代子
森下 康子
森田 利和
宮田 香
井口 淳子
石川かおり
伊東 和子
伊藤 和子

遺跡碑に刻める哀史草若葉
 花曇胃の腑に適ふ今朝の粥
 言葉なき妣とゐる夜や春の雨
 悲喜交ぜて桜語れる八十路かな
 蒲公英の群がり咲くは遅しき
 麝香藤に内なるをんな目覚めけり
 泊月の句碑に尺蠖箕面山
 引揚げの平棧橋遅ざくら
 動きたる仁王の眉宇や蝶の昼
 子は母の速度に合はせ春日傘
 瀬田青く花満開の昼下り
 花疲れ川を眺めてカプチーノ
 夏燕つと寄る社家の小流れに
 羊は毛刈られ一斉草を食む
 トンネルに入れば煤煙昭和の日
 病棟の桜こんなに美しき
 葉桜や有機卵の特売日
 茎立ちを耄けさせたる野辺の風
 春愁や吾にも孤立無援の日
 柏餅五行五列に並べ売る

大島みよし
 大松 一枝
 片岡久美子
 北尾 章郎
 木戸 宏子
 国包 澄子
 坂上 香菜
 坂根 宏子
 阪本 哲弘
 佐用 圭子
 杉本 綾
 田中 淺子
 辻 知代子
 中川すみ子
 中本 吉信
 能勢 栄子
 常田 創
 小澤 菜美
 宮崎左智子
 常田 希望

廃校に子らのにほひと若葉の香
 峡が峡らしく見ゆる日野火けふる
 子の郷へ卯浪に揺られ急ぎ旅
 漱石の「ころ」読み終へ朧月
 無人駅五月の闇に包まれて
 天の気を掴みて気功目に青葉
 達磨絵を掛けたる書院若葉風
 母の忌の兄も老いたり麦の秋
 川渡御へ若人一気神輿舁く
 夜明けより紅を化粧へる花蕾
 口中に残る木の芽のよき香り
 長老の乾杯音頭鮎脰
 ほやほやを奨める店主柏餅
 溪谷行くトロツコ列車若葉風
 風誘ふ酒蔵裏の夏柳
 柿若葉俎干して明日香村
 矢車の回り隣家に初男の子
 矢絣の袷今なほ手放せず
 麦秋や水満ち満ちて奥多摩湖
 流鏝馬の的の中に湧く初夏の杜

松田 和子
 松岡 和子
 川崎 利子
 伊藤 純子
 西郷 慶子
 稲田 和子
 高谷 栄一
 谷口 俊郎
 人見 洋子
 平井 紀夫
 福本 すみ子
 藤本 秀機
 増田 一代
 松田 洋子
 宮越 久子
 宮濱 安子
 山崎 真義
 山田 愛子
 山本 丈夫
 横田 矩子

新茶汲む父の好みの九谷焼
 灌がれてまた灌がれて甘茶仏
 焼菓子に抹茶の風味夏近し
 しゃきしゃきと青菜食感楽しめる
 酒蔵の岸行く舟に花吹雪
 遠く聞く雉声耳に寝落ちける
 堅牢の城壁に入り春惜しむ
 屋根替をなりはひとして十六代
 児が母に贈る白詰草冠
 執心の洋画に逢へり昭和の日
 新樹光浴びつつ野外コンサート
 子供の日故郷遠くなりける
 若鮎の甘露煮旨し湖の味
 薫風や白無垢内の永遠の笑み
 思ひ出のなつメロ三昧昭和の日
 花々に蝶戯るる午後の刻
 椀子蕎麦額に汗の給仕たち
 嫁せし子のピアノ音なし春更くる
 嫁ぐ子の笑顔忘れじ沙羅の花

吉田 宏之
 和田 郁子
 渡部 法子
 伊藤 憲子
 伊庭 玲子
 大谷 信子
 桂 敦子
 河田 孝子
 黒住 康晴
 小林 久子
 小西 和子
 笹井 康夫
 佐々木 和子
 杉田 福
 鷺見たえ子
 高屋喜美子
 津田 富司
 中井 登喜子
 中井 弘一

琥珀集

沙羅の花

竹内 悦子

沙羅の花の気品自づと手を合はす
沙羅の花インドの釈迦を惟みて
急逝の人に捧ぐる胡蝶蘭
満一歳の嬰を祝ふかに牡丹咲く
蒼天や落花急げる三井の山
昭和の日戦後生まれの飢ゑ知らず
風青し句帳片手に義仲寺へ

木蓮

西垣 順子

運び終へ庭の木蓮目にしむる(引越しの日)
半世紀を勤むる暮し弥生尽
花海棠半世紀経て今閉づる
半世紀のたつきの思ひ椿落つ
夫と過せし思ひ出めぐり弥生尽
アマリリス久方ぶりに絵筆とる
車窓より桜並木の見えかくれ

佐保川

山口キミコ

平城京の羅城門跡残る花
佐保川にぬつと顔出す春の亀
甲羅干す亀の群生春暑し
佐保川辺枳殻地蔵に咲く枳殻
色褪する名残の花は葉の影に
祭神は稗田阿礼風薫る
春惜しむ稗田環濠亀の群

躑躅

塩路 五郎

たんぼぼの絮よき風を待ちてをり
春風にゆるりと動く象の耳
教会の鐘リズムカル新樹光
トランペットの試奏高らか新樹光
眼裏を焦がして躑躅燃え盛る
賓頭盧の右脳を撫づる春日和
葉桜や流るる雲を透かし見て

地球丸き

鈴木 照子

満天の星降る岬新樹の香
赤秀樹林に夏うぐひすや日の出待ち
鋭角の岬一気に夏来る
地球丸きと思ふ室戸の青岬
土佐の宿鯉料理の豪快さ
睡蓮や光の遊ぶモネの庭（高知県北川村）
良妻てふ千代の像あり南風の城（二豊の妻）

亀の鳴く

栗倉 昌子

太公望ひとり残れる日永かな
制服のプリーツ美しき四月かな
独り居のこれも又よし目借時
聴覚の検査さ中や亀の鳴く
蜂来るや狭庭そろそろ開花どき
初めてのひとり旅なり子供の日
みづき咲き外つ国よりの嫁御寮

退院

飯田美千子

長かりし入院の日々山笑ふ
退院の伸びたる吐息霾ぐもり
ピラスして退院の朝聖五月
退院し帰る我家に薔薇香る
久々に家族集うて鮎パーティ
我家ほど良きものはなし新茶飲む
退院や季節は早も夏となり

花浄土

秦 和子

かくれ里

山崎 里美

咲き誇る光と影や藤の棚

一芸に秀づる友のかしは餅

満開のつつじまさしく花浄土

扁額わけんあいごは和顔愛語わげんあいごや新茶汲み

菖蒲浮かべ疲れを癒す足湯かな

甘き風に髪あそばせて紫木蓮

縁起物の一番新茶賜ひける

鍋冠祭

橋本 靖子

卯 浪

笠井 清佑

近江路の田は今まさに田植どき

二時よりの祭りに先づは飲茶かな

筑摩祭鍋釜かづく乙女たち（米原・鍋冠祭五句）

鉢かづき姫と見まがふ鍋乙女

木杵履く乙女は園児さくらんぼ

疾風吹き鍋乙女らの笑み消えて

蹴り奴エートマカナのまつり唄

泣き声の洩るる保育所四月かな

風光る奇岩の多き金勝寺

春の雲を突きぬく気魄天狗岩

別れ霜磨崖かくれり在るかくれ里

咲き誇るつつじ背にして家族撮る

藤の香に抱かれ弁当広げける

甲子園にて送る声援青葉の夜

休み田に太陽発電薄暑かな

アシストの自転車快走夏はじめ

書肆棚の季寄せ繰りある薄暑かな

陸奥の御魂鎮めの卯浪かな

夏霞白巖洗ふ浄土ヶ浜

藤の香や風をはらみて匂ひ満つ

空青し春日の杜菖蒲かくれり青く

風薫る

三川美代子

風薫る仏に捧ぐコンサート
誘はれて比良山荘の豆の飯
田水張り千の棚田の日を返す
湖畔ゆきメタセコイヤの新樹かな
春泥を跳びて失ふイヤリング
夕風に散り急ぎけり桜糝
スカイプの会話弾めり桃の花

筍三昧

森下 康子

試し書きの五色のペンや夏立てる
「それいゆ」を抜け出す少女チューリップ
春行くや閉店セールなほつづき
忍び足で近づく気配子供の日
満足の筍三昧旬の贅
母の日の母黙々と米を磨ぐ
大き息して新緑に深入りす

粽

森田 利和

春愁や夜汽車の窓は雨もよひ
恙無きことを嘯みしめ粽解く
男坂を一步踏みしめ麦の秋
もてなしの鄙の団子や聖五月
古文書の仮名読みかぬる日の永し
万葉の和歌の小径や躑躅燃え
水源に翡翠の影飛行機雲

藤

宮田 香

神将の襷に残る朱春の堂
降り注ぐ桜の糝や八一歌碑
藤揺れて社殿回廊影生るる
花嫁の涙や杜に藤垂れて
復旧の川辺の雀隠れかな
越前の一輪挿にあづま菊
三叉路に案内の埴輪げんげ畑

瑠璃集

鮎解禁

宮崎左智子

おそらくやこれより美しき椿見ず（おそらく椿）

春愁や吾にも孤立無援の日

早朝の靄やつつじの山隠し

鮎解禁太公望へにぎり飯

塾歸りの影踏みの子やはや五月

茄子の笛

常田 創

五行五列

常田 希望

葉桜や有機卵の特売日

手品師は庭に豌豆咲かせけり

沢蟹や小道曲がれば二月堂

なめくじの縮みしところ濃くなりぬ

今を選び未来を選ぶや茄子の笛

初虹やたまに電車に遅れても

遠足の子らの中心行基像

葉桜の影落とす夜の幼稚園

たかんなの真白く育つ古墳かな

柏餅五行五列に並べ売る

さみだるる

小澤 菜美

若葉の香

松田 和子

薪能待つ人群や濠の風（近江八幡）

疏水舟の往き来の記憶花は葉に

久々の豊漁ニユース春鮎

古代湖の生ひ立ち縷々とさみだるる

茎立ちを耄けさせたる野辺の風

宇宙へと永久に羽ばたけシャボン玉

廃校に子らのにほひと若葉の香（吹屋二句）

ベンガラや淡きピンクの夏帽子

魅せらるる水面に淡き藤の房（尾張）

白藤の初々しさをかんざしに

七月号月評

塩路 隆子

運び終へ庭の木蓮目にしむる

西垣 順子

作者はこの度半世紀以上も住まいのあった洛中の家屋を財団法人に寄贈をされ、マンションに移られた。その大変な手続きから引越しに到る全てを、ご自身お一人でなされた方である。お疲れになったことと思う。引越し当日の感懐をさらりと「木蓮が月にしむ」の措辞で表現し句にされているが、一句に秘められたご苦労は筆舌に尽くし難いものであったであろう。良く頑張られたと思う。関連句もそれぞれ心に響くものがある。

昭和の日戦後生まれの飢ゑ知らず

竹内 悦子

昭和天皇の誕生日であった四月二十九日が、2009年に、従来のみどりの日を改称して昭和の日となり当手を顧みる日として設定された。作者は戦後であるから二十年以降の生まれ、食料不足を感じない時代に育たれた自分を幸せと回顧されているのであろう。「飢ゑ知らず」の措辞が効果的である。

祭神は稗田阿礼風薫る

山口キミコ

歴史の教科書に古事記三巻は記憶力の良い「天武天皇

の舎人稗田阿礼が諳んじたものを太安万侶が筆録した」との一文があったことが蘇る。これにより現存する日本最古の歴史書「古事記」が誕生することになる。奈良県郡山市稗田にはその遺徳を偲ぶ売田神社があり、詣でられた作者の心情「風薫る」が効いている。

たんぼの絮よき風を待ちてをり

塩路 五郎

久方振りの登場である。蒲公英は世界に広く分布しているが昨今は西洋たんぼなど帰化したものが多く本来のたんぼを見かけることは少なくなっている。たんぼの絮毛は風により、パラシュート状に飛翔して四散してゆくその様子は愛らしく、花とともに俳人に好まれる植物である。実が熟するのを待つ様子を「よき風を待つ」との措辞に惹かれる。

赤秀樹林に夏うぐひすや日の出待ち

鈴木 照子

高知県室戸岬へ旅をされたときの句である。赤秀（あこう）とはクワ科の垂熱帯に繁茂する高さ20メートルの大木で、幹の周囲から気根を出す植物で、愛媛県と佐賀県の赤秀樹林は北限分布地として天然記念物に指定されている。鬱蒼とした夜明け前の樹林に鶯を聞きながら日の出を待つ作者のときめきが伝わる句。シャッターチャンスの良い作品である。